

高校生の無気力感と攻撃性の関連性

～「学級雰囲気」「教師サポート」「両親サポート」「友人関係」が与える影響について～

田中 陽子 栗山 和広 園田 順一

Relationships of apathy and aggression within high school students

Yoko TANAKA Kazuhiro KURIYAMA Junichi SONODA

Abstract

This research investigated the relationship between 1) apathy and aggression 2) apathy and teacher's support, class atmosphere, support of parents and friendship 3) aggression and teacher's support, class atmosphere, support of parents and friendship within high school students. The questionnaires in terms of both apathy (20 questions) and aggression (22 questions) were administered to 275 high school subjects.

As the result of the factory analysis, three factors for apathy and four factors concerning aggression were found, and correlations between both factors were clearly related. In addition, it was found that friendship influenced on their apathy and aggression.

These results suggested that children possessing high apathy tendencies were deeply associated with aggressive behaviour, social supports will be influential factor for the adolescent behavior.

Key words : apathy, aggression, high school students, correlations

キーワード：無気力感 攻撃性 高校生 相関

「子どもたちが変わった」とはよく耳にする言葉である。最近のひきこもりあるいは不登校の子どもたちについても従来と異なるとして、鍋田（2001）は5つのタイプをあげている。①浮遊タイプの増加、②一見すると元気なタイプ、③自分からは対人関係を積極的には求められないあるいは作れないタイプ、④フリー・スクール症候群、⑤スキゾイド化の5つである。大人は既成概念にとらわれることなく、子どもたちを捉えていかなければならない。その場合、臨床で得た印象も重要であると思われる。

最近の子どもたちの特徴として、無気力状態と攻撃性の高さについては、それぞれがよく論じられているところである。しかし、一見相反している両者を関係づける

研究はほとんど行われていない。実際には、無気力に見えるほどのおとなしい子どもが突然に攻撃行動をとる事例を挙げることは大変容易なことである。

田中・栗山・園田他（2001）は、小学生・中学生を対象として、無気力感と攻撃性の関連性について検討している。無気力感については、小学生において「充実感の欠如」「積極的学習態度の欠如」「身体的不全感」「非能動性・無力感」の4因子を抽出した。中学生では「意欲減退・身体的不全」「充実感・将来展望欠如」「消極的友人関係」「無力感・あきらめ」「積極的学習態度の欠如」の5因子を抽出した。一方、攻撃性については、小学生・中学生とも「言語的攻撃」「身体的攻撃」「短気」「敵意」の4因子を抽出した。その結果、小学生・中学生とも無気力感に

は攻撃性が内在していることがある程度明らかにされた。特に小学生・中学生とも日常生活の中での無力感・意欲のなさ・生活リズムのみだれ・疲労感を持つ子どもが、衝動性・怒りっぽさ・他者に対する否定的な態度を有すると考えられた。中学生においては、特に友人関係が重要であり、適切な友人関係を保つことが怒りの抑制や他者への肯定的な態度につながると考えられた。

また、田中・栗山・園田他(2002)では、小学生・中学生の無気力と攻撃性に大きな影響を与えているものとして、「学級雰囲気」「教師サポート」「友人関係」をあげ、それらの要因が無気力感と攻撃性を抑制するかを検討している。さらに、それが小学生と中学生では異なるかという発達のな面についても検討している。その結果、小学生・中学生の無気力と攻撃性は、友人をはじめ学級内の活動で抑制され得ると考えられる。そして、小学生には教師のサポートも有効であるが、中学生には影響が少なかった。子どもたちの発達に配慮した指導が必要であると考えられた。

本研究ではそれらを踏まえ、高校生の無気力感と攻撃性に関連があるのかを検討する。また、無気力感と攻撃性に大きな影響を与えていると考えられる学校での人間関係、そしてその関係が醸し出す学級の雰囲気、さらに思春期で問題になる親子関係に注目した。すなわち、無気力感と攻撃性を抑制する要因として、「学級雰囲気」、「教師サポート」、「両親サポート」「友人関係」の4要因について検討した。

方法

1. 調査対象

調査対象は、某県立高校の商業科、情報処理科、国際学科の2年生275名に実施した。

2. 調査時期及び調査方法

調査は2000年11月に実施した。各学級担任に実施方法を説明し、実施を依頼した。全て学級ごとの集団一斉実施である。所要時間は約15分である。

3. 調査内容

質問紙は、無気力尺度、攻撃性尺度、学級雰囲気尺度、教師サポート尺度、両親サポート尺度、友人関係尺度の6つの部分からなる。

無気力感尺度は笠井ら(1995)の20項目を使用した。攻撃性尺度はHAQC(坂井ら、1998)の22項目を使用した。学級雰囲気尺度は、小林と仲田(1997)の10項目を使用した。教師サポート尺度、両親サポート尺度と友人関係尺度については、戸ヶ崎ら(1993)を参照して、

それぞれ5項目を作成した。

4. 結果の処理

それぞれの項目について「とてもよくあてはまる」「よくあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の4段階評定で回答を求め、上記の順に4~1点を与えた。無気力傾向であるほど、また攻撃的であるほど得点は高くなるようになっている。逆転項目も得点が高いほど無気力傾向や攻撃性は高くなるように得点化した。

結果と考察

1. 無気力感と攻撃性の因子分析と相関

すべての項目について因子分析(主因子法、Varimax回転)を行った。その結果、無気力感について、固有値1.0以上の基準で、3因子が抽出された。第1因子は「意欲減退・身体的不全」、第2因子は「将来展望の欠如」、第3因子は「消極的友人関係」であった。攻撃性について、固有値1.0以上の基準で4因子が抽出された。第1因子は「言語的攻撃」、第2因子は「身体的攻撃」、第3因子は「短気」、第4因子は「敵意」であった。

次に、一つの因子に絶対値.44以上の因子負荷量を有し、他の因子に絶対値.30以上の負荷量を持たない項目を選択し、下位カテゴリーを構成した。無気力感の下位カテゴリーごとの α 係数は、.64、.67、.69であった。攻撃性の下位カテゴリーごとの α 係数は、.76、.77、.72、.77であった。 α 係数による信頼係数から信頼性はあると考えられる。

無気力感の下位カテゴリーと攻撃性の下位カテゴリーの得点の関連をピアソン係数で算出した。その結果が、表1に示されている。

「意欲減退・身体的不全」は「身体的攻撃」と「短気」に正の相関が見られた。これは、疲労感や面倒くさいという感じが思考力を落とし、イライラ感を増大させるとともに、身体的攻撃につながっていると考えられる。「消極的友人関係」は「短気」と「敵意」に正の相関が得られた。友人関係は相手のあることであるため、対人的な怒りや不信感と結びつくのは想像に難くない。さらに、人間関係の面倒くささや疲労感も相手のせいにしてしまっているのではないと思われる。思春期特有の孤高なプライドの影響があるかもしれないが、加えて孤立の居心地の悪さもあるかもしれない。思春期の特徴である微妙な対人関係が浮かび上がってくる。特に「短気」は無気力感の3因子ともに関係している。無気力感の強さが短気と強く結びついていると思われる。「意欲減退・身体

的不全」には授業関係の項目も含まれており、授業、将来、友人など高校生にとって重要であると思われることがうまくいっていない、またはそう感じられると短気を起こしやすいと考えられる。

しかし、「将来展望の欠如」と「消極的友人関係」は「言語的攻撃」に負の相関が得られている。これは、「言語的攻撃」と命名した項目を、高校生はアサーションとして捉えていたことが考えられる。アイデンティティと親密な友人関係の確立が思春期の課題であるとする、自分の考えをはっきり言うことは友人関係には不可欠なものとなる。それで、友人に働きかけていない、または友人がいない場合は「言語的攻撃」が低くなるのではないだろうか。「将来展望の欠如」については、将来展望がはっきりしていないと言語表現ができないことが考えられる。あいまいな将来と相まってなんとなく日常を過ごしている高校生の姿が浮かんでくる。

これらのことから、高校生も無気力感と攻撃性に関連性のあることが示された。登校している高校生の中にも、無気力感の高い生徒には強い攻撃性の内在していることが示唆される。

2. 無気力感と「学級雰囲気」、「教師サポート」、「両親サポート」、「友人関係」の関連

無気力感の各側面を目的変数、「学級雰囲気」、「教師サポート」、「両親サポート」及び「友人サポート」を説明変

数として、直接投入法による重回帰分析を行った。その結果を表2に示した。

「意欲減退・身体的不全」と「学級雰囲気」、「教師サポート」、「友人サポート」に有意な負の関連が見られた。意欲や身体的な感じは学級や学校に影響を受けていると考えられる。「意欲減退・身体的不全」の項目の中に授業に関する項目が含まれていることも合わせると、教師の働きかけが必要なのではないだろうか。その場合、高校生に対しては、比較的本人を尊重する教師の態度が一般的であろう。しかし、本研究の「教師サポート」は教師の受容かつ一緒に考えようとする態度であった。高校生への指導の方法を柔軟にする必要がある。意欲の減退や身体の不全感を生徒から訴えられると、教師は指導の困難さを強く感じるであろうが、高校生は教師のサポートに期待しているのではないだろうか。

また、「消極的友人関係」と「学級雰囲気」、「両親サポート」、「友人サポート」に有意な負の関連が見られた。「学級雰囲気」と「友人サポート」が関連しているのは自明のことであろう。ここに「両親サポート」が関連していることに注目したい。両親は人間関係の経験豊富な者として高校生から認識されているのかもしれない。最近の特徴である脆い友人との関係を持続するために、両親の後押しが必要なかもしれない。また、自立を課題としている思春期にあって、最近は親子に依存的な関係が続いているとも言えよう。両親も子どもの様子に気を配

表1 高校生の無気力と攻撃性の相関 (n=275)

		攻 撃 性			
		言語的攻撃	身体的攻撃	短 気	敵 意
無 気 力	意欲減退・身体的不全	0.11	0.20**	0.25**	0.09
	意欲減退・身体的不全	-0.12*	0.02	0.19**	-0.02
	将来展望の欠如	-0.19**	0.05	0.14**	0.41**

* p < .05 ** P < .01

表2 高校生におけるソーシャルサポートと無気力感との関連

	意欲減退・身体的不全	将来展望の欠如	消極的友人関係
学級雰囲気	-0.15**	0.00	-0.23**
教師サポート	-0.15**	-0.07	-0.07
両親サポート	-0.08	-0.10	-0.11*
両親サポート	-0.08	-0.10	-0.11*
友人サポート	-0.14*	-0.09	-0.40**

* p < .05 ** P < .01

り、子どもも甘えるような親子関係があるのではないだろうか。いずれにしても、高校生にとって日常生活において、友人は大きなサポートであると言えよう。

3. 攻撃性と「学級雰囲気」、「教師サポート」、「両親サポート」、「友人関係」の相関

攻撃性の各側面を目的変数、「学級雰囲気」、「教師サポート」、「両親サポート」及び「友人サポート」を説明変数として、無気力感と同様、直接投入法による重回帰分析を行った。その結果を表3に示した。

「身体的攻撃」は「教師サポート」に有意な負の相関が見られた。これは小・中学生が「友人サポート」が影響していたのとは異なる結果である。思春期には両親ではない第三者の大人のかかわりが必要なのだろうか。逆に、身体的攻撃の相手がどこかという問題もある。文部科学省の統計では、最近校内暴力の中では対教師暴力の件数が多い。また、一旦始まった身体的攻撃は、高校生同士の友人では止められないであろう。それならば、教師の対応の一つとして、生徒の言い分を聞き、一緒に考えようとする「教師サポート」のあり方は高校生を落ち着かせることに有効ではないだろうか。

「敵意」は「学級雰囲気」、「両親サポート」、「友人サポート」に有意な負の関連が見られた。学級の影響が大きいのは中学校と同じ結果である。また、両親のかかわりが有効であろう。対人関係ストレスに弱い高校生は、両親の後押しによって、友人関係を続けているのかもしれない。

なお、「言語的攻撃」と「友人サポート」に正の関連が見られるが、これは高校生が「言語的攻撃」をアサーションと捉えたことによると考えられる。友人に相談したり、自分の考えを言ったり、言葉によるコミュニケーションが行われているのであろう。高校生の場合も友人関係は大切である。柴橋（1998）によれば、「個」に目覚め、自分らしさを意識するようになる思春期・青年期は、自己を強く打ち出すか、もしくは自己を抑えるかという

葛藤がより深くなり、対人関係における課題として強く意識される時期であるとしている。この自己を強く打ち出すことが攻撃性とアサーションを区別しにくくしていると思われる。この点について、柴橋（1998）は、多少感情的になっていても、それは発達途上の青年たちにとって多少は認められるべきもので、攻撃性の問題は大人の場合に比べて少しゆるやかに捉えていく必要があると述べている。そして、自己表現と同時に、他者の言い分に耳を傾けようとする態度を含めてアサーションを捉えることが、攻撃的な主張との区別、熟慮的な主張の評価などにつながるとしている。

全体的考察

本研究は、高校生を対象にして無気力感と攻撃性の関連性について検討した。また、無気力感と攻撃性を抑制する要因として、「学級雰囲気」、「教師サポート」、「両親サポート」「友人関係」の4要因について検討した。

高校生の無気力感の下位カテゴリーは「意欲減退・身体的不全」「将来展望の欠如」「消極的友人関係」の3つであった。攻撃性の下位カテゴリーは、「言語的攻撃」「身体的攻撃」「短気」「敵意」の4つであった。

田中ら（2001）によれば、小学生の無気力感の下位カテゴリーは「充実感の欠如」、「積極的学習態度の欠如」、「身体的不全感」、「非能動性・無力感」の4因子、中学生では「意欲減退・身体的不全感」、「充実感・将来展望欠如」、「消極的友人関係」、「無力感・あきらめ」、「積極的学習態度の欠如」の5因子である。発達の視点からみると、中学生・高校生に将来展望の視点が入ってくること、高校生になると学習態度は意欲や将来展望など他のものと結びつきが深くなるのが、特徴としてあげられよう。

菅・上地（1996）によれば、高校生の学校ストレスは「学業・進路」「校則・規制」「教師との関係」「友人との関係」「部活動」の5因子となっている。それに伴うストレス反応の平均点が高いのは、「無気力反応」「不機

表3 高校生におけるソーシャルサポートと攻撃性との関連

	言語的攻撃	身体的攻撃	短気	敵意
学級雰囲気	0. 08	-0. 02	-0. 07	-0. 27**
教師サポート	-0. 12	-0. 16*	-0. 08	-0. 02
両親サポート	-0. 04	0. 05	-0. 12	-0. 16**
両親サポート	0. 25**	-0. 07	-0. 08	-0. 15**
友人サポート	0. 28**	0. 18*	0. 23**	0. 36**

* p < . 05 ** P < . 01

嫌・怒り」「身体反応」「抑うつ不安」の順である。これらの結果は、本研究を支持するものと考えられる。

高校生の無気力感と攻撃性の関連性については、「意欲減退・身体的不全」は「身体的攻撃」「短気」に、「将来展望の欠如」は「言語的攻撃」「短気」に、「消極的友人関係」は「言語的攻撃」「短気」「敵意」に関連があることが明らかになった。田中ら（2001）によれば小学生・中学生とも、一般に相反する特性と考えられている無気力感と攻撃性に関連のあることが明らかにされた。

これらを通して、小学生・中学生・高校生で普通に学校に行っている子どもの中でも、無気力感の高い子どもには強い攻撃性が内在しているといえよう。特に、高校生は「短気」に結びつくことが多いと考えられる。彼らには口癖のような「ムカつく」という表現がピタリとくる心情があるのであろう。また、中学生においては、「消極的友人関係」の因子と「短気」・「敵意」の因子と相関が見られている。高校生では加えて「言語的攻撃」にも相関が見られている。この「言語的攻撃」はアサーションと考えられよう。そうすると、高校生では中学生同様、対人関係において友人関係が重要であり、積極的な言語コミュニケーションを通して、適切な友人関係を保つことが怒りの抑制や他者への肯定的態度につながるといえよう。

高校生では、「意欲減退・身体的不全」を抑制するには「学級雰囲気」「教師サポート」「友人サポート」が、「消極的友人関係」を抑制するには「学級雰囲気」「両親サポート」「友人サポート」が有効であることが示唆された。天貝（1996）によれば、中・高校生では、最も親しい友人と最も心理的距離が近く、その次に家族、普通の友人、最も親しい教師、普通の教師という順であった。また、高校生では、それらの心理的距離と信頼感は独立したものであることが示されている。それによると、家族に対する心理的距離は、中学生のほうが高校生よりも近かったが、本研究では、高校生にも「両親サポート」が有効であることが示された。天貝の言うように、心理的距離と信頼感は独立している故かもしれない。

田中ら（2001）によれば、小・中学生の多くの無気力感には教師のはたらきかけを含めた学級内の活動で抑制され得ると考えられる。高校生も同様であると考えられる。ただし、無気力が強くなるほど学級雰囲気の良さや教師サポートを感じにくくなるため、それらを伝える工夫が必要となるだろう。中学生では、「教師サポート」が有効でなかったが、高校生では「教師サポート」や「両親サポート」といった大人のサポートが有効であると考えられる。堀井ら（1995）によれば、高校から大学にか

けて、他者評価に対する不安意識が減少する傾向にあり、また、自分の能力に対する不満など、否定的自己意識も減少する傾向にあった。また、堀井・小川（1997）によれば、青年期における対人不安意識は、中学生は対人不安意識の要因が未分化であり、高校生になると視線恐怖の心性を中心に対他の要因の分化が始まり、大学生で対他の要因と対自的要因の分化がより明確化されている。この対自的要因の「<生きることに疲れている>悩み」「<自分を統制できない>悩み」は、本研究の無気力感と攻撃性に非常に関連があるのではないかと思われる。さらに、対他の要因は有効なソーシャルサポートの検討に資すると考えられる。田中ら（1994）でも、大学生の対人不安意識は量的に減弱しており、また、その悩みや不安の構造も変化していることが示されている。

高校生の攻撃性では、「身体的攻撃」を抑制するには「教師サポート」が、「敵意」を抑制するには「学級雰囲気」「両親サポート」「友人サポート」が有効であることが示唆された。なお、「言語的攻撃」はアサーションとの区別が困難である。田中ら（2001）によると、小・中学生の攻撃性は学級雰囲気や友人関係に大きな影響を受けている。高校生も同様であり、特に「敵意」は学級雰囲気や友人関係に影響を受けるとともに、敵意を持つことで学級雰囲気や友人関係を良く思えないというように悪循環をもたらす可能性もあるであろう。これは不登校や中退しようとした高校生が再登校などを試みる場合にも影響が強いのではないだろうか。敵意を増大させることで孤立してしまうからである。この状態が強くなりすぎると引きこもりの状態になるのではないだろうか。一方、中学生では攻撃性と「教師サポート」には関係がなかったが、高校生では「身体的攻撃」には有効であった。「意欲減退・身体的不全」とあわせて考えると、生徒のやる気のなさや身体的攻撃には注目するが、かかわりを投げかけてしまっている教師の姿が浮かび上がってくる。そして、これらは高校中退の原因となりやすいのかもしれない。また、子どもたちは身体的攻撃を行う場合、誰かに止めてほしいと思う場合があることはよく言われることであるが、高校生も同様であろう。そして、それは現在のところ家庭よりも教師がかかわりを期待されているとは考えられないであろうか。高校生にも子どもたちの無気力感や攻撃性が高まり、問題が起こる前に継続した適切な学級活動が求められよう。大人サポートが有効なのは、無気力感と同様である。谷井（1996）によれば、親の受容は、高校生の学校適応に対して正の影響を示し、なお、適応援助は子どもにとって親の援助行動を必要とする時期かどうかによって、正負まったく逆の影響

を与えることがあることが示された。高校生にとって、親の影響は強いと考えられる。大人との心理的距離が微妙になるからこそ、大人のサポートは目を離さず、タイミングを計りながら行われなければならないのではないだろうか。

本研究では学級の雰囲気、教師のサポート、両親サポート、友人関係と主に学校および人間関係に注目した。今後の課題として、子どもの無気力感と攻撃性の関連について、広く日常生活からの検討が必要であろう。また、最近の無気力の研究の始まりは、スチューデントアパシー、すなわち大学生の無気力から始まっているといっても過言ではない。今後は発達の観点からも、大学生を対象として検討したい。さらに、本研究では触れられなかったが、無気力感と攻撃性という一般的に相反すると考えられる特性になぜ関連が見られるのかを検討していく必要がある。

引用文献

- 1) 天貝由美子 1996 中・高校生における心理的距離と信頼感との関係 カウンセリング研究、29、130-134.
- 2) 菅徹・上地安昭 1996 高校生の心理・社会的ストレスに関する一考察 カウンセリング研究、29、197-207.
- 3) 笠井孝久・村松健司・保坂亮・三浦香苗 1995 小学生・中学生の無気力感とその関連要因 教育心理学研究、43、424-435.
- 4) 小林正幸・仲田洋子 1997 学校享受感に及ぼす教師の指導の影響力に関する研究 日本カウンセリング研究、30、207-215
- 5) 堀井俊章・小川捷之 1997 青年期における対人不安意識の発達の变化 心理臨床学研究、14、4、448-455.
- 6) 堀井俊章・卯月研次・小川捷之 1995 青年期の対人不安意識に関する研究 心理臨床学研究、13、2、215-221.
- 7) 鍋田泰孝 1999 学校不適応とひきこもり ころの科学 87 20-26.
- 8) 柴橋祐子 1998 思春期の友人関係におけるアサーション能力育成の意義と主張性尺度研究の課題について カウンセリング研究、31、19-26.
- 9) 坂井明子・大竹恵子・嶋田洋徳・安藤明人 1999 小学生用攻撃性質問紙に関する研究(3) 日本心理学会第63回大会発表論文集、718.
- 10) 島井哲志・山崎勝之編 2002 攻撃性の心理—健康編— ナカニシヤ出版.
- 11) 田中康弘・穂刈千恵・福田周・小川捷之 1994 青年期における対人不安意識の特性と構造の時代的推移 心理臨床学研究、12、2、121-131.
- 12) 田中陽子・栗山和広・園田順一・柴田良一 2001 小学生・中学生の無気力感と攻撃性の関連(I) 九州保健福祉大学紀要、2、143-148.
- 13) 田中陽子・栗山和広・園田順一・柴田良一 2002 小学生・中学生の無気力感と攻撃性の関連(II) 九州保健福祉大学紀要、3、107-111.
- 14) 谷井淳一 1996 学校適応の一指標としての高校生のスクール・モラルと彼らの親の自己評定に基づく親役割行動の関係 心理臨床学研究、14、1、66-74.
- 15) 戸ヶ崎泰子・秋山香澄・坂野雄二 1994 教師の指導と児童のストレス反応の関係 ヒューマンサイエンス リサーチ、3、59-75.
- 16) 山崎勝之・島井哲志編 2002 攻撃性の心理—発達・教育編— ナカニシヤ出版.